

立ち飲み文化再燃

こんにちは！サーマルタンクの新洋技研工業です！・・・と毎回ご挨拶をしておりますので、弊社のことを「タンク屋さん」だと思われている方が結構いらっしゃると思います。

実は醸造関係がメインの設備屋でして、結構色々な設備を納めております。弊社の会長は酒造業界の設備を手掛けて五十年以上、特に若いころは全国のお蔵にお邪魔して麹室の施工や改造を手掛けておりました。その流れから弊社が推奨している「ステンパネル式麹室」を導入、経験値を活かした空調理論により施工してきました。また、タンクの温度制御御工事なども昭和四〇年代より手掛けており、サーマルタンクもその経験から開発されました。そういった意味では結構パイオニアなんですすよ！ということと、タンク以外の設備のご相談も承っておりますので、宜しくお願い致します！・・・と、ちゃっかり弊社のPRをしてしまいました！

ここ数年で、いわゆる「立ち飲み」文化が再燃しております。それも和食からフレンチ系、イタリアン系、スパニッシュ系・・・と実に多種多様で驚かされます。そして提供される料理のクオリティは高く、その割には安めの価格設定となっております。これは、立ち飲みの特徴である、回転率の良さが価格設定に寄与しているわけですね。昔は立ち飲みの主役と言えば「日本酒」それが今はどちらかと言うと料理が主役で、お酒はというと、ワイン、カクテル、ビール etc・・・と選択の幅は広がっています。そのような中で、日本酒をどのようにして訪れるお客さんを選択してもらおうか？ そのキーワードは「QVS」、つまりクオリティ、バリエーション、そしてスタイル。この三位一体でお客様へ提供をしてもらうことではないかと考えます。どれも当たり前のことじゃないか！と言われてしまいましたが、実はその当たり前のことが出来ていないことのほうが多いということとを、仕事柄あちこち出張し、夜は美味しいお酒と料理を求めてお店に行って、つくづく実感してしまうのでした。都会のど真ん中で、立ち飲み文化の主役を再び担っていただきたいと願う、のん兵衛のちよつと長いつぶやきでした。

日本の野鳥シリーズ

髪はカラスの

技術営業部 佐藤 弘

洗車は面倒くさい。それに、安全に飲める水を車の汚れ落としに使うなんて、世界の水事情に照らせばバチの一つも当たりそうな気がする。だからいつも雨まかせのズボラで通している。

滑らかな表面の車がこれだから、粗い布地の様な鳥の羽毛にはどれほどの汚れが付着することか。きれいに見えても1リッターの空気中には数万の微粒子が浮遊しているという。水蒸気以外にホコリや花粉にカビの胞子、煤煙やら病原菌などマイクロヤノサイズのもものが漂っているのだろう。せっかく水浴びと羽繕いをして、脂肪腺から出る脂で背面を丹念にコーティングしたところに汚れがついたら、撥水効果はガタ落ちになる。

鳥の水浴びの目的は汚れ落としの他に、羽毛ダニなど外部寄生虫を退治するためというのがこれは疑問だ。血を吸われる訳でもなく、付着した微細な有機物や古い羽毛を餌にしているだけの、実害のない居候を駆除する理由がない。一方、気温が上がるととたんに水場を訪れる鳥が増える。そして、水浴び後の小鳥に触ると胸から腹にかけて少し湿っているから、その蒸発熱でしばし涼をとるといふ説には素直になつづける。なにしろ、盛夏の炎天下を飛びまわるツバメは頻りに水中にダイブするくらいだ。

カラスの行水は人間さま対カラスの入浴タイムの比較であって、カラスの水浴びはむしろ他の鳥より明らかに長い。ところで、しっかり汚れを落とした後のカラスの濡れ羽色を、間近に見たことが皆様おありだろうか。漆黒の羽毛が陽光をうけて青緑色に輝くから、カラスは黒一色というイメージが変わる。

さて、女性の髪が右を向いても左を見ても、いつの間にか茶色になっていることに驚く。まずは周りの女性総スキャン承知の独断だが、茶髪でより美しく見えるわけがなし、髪が傷むだろうに手間ひまをかける意味が分からない。その点黒は無彩色だから、着るもの持ち物アクセサリなどの色との調和を乱さない。余計なお世話ながら、トータルにおしゃれを考えるなら大和撫子の髪はみどりなす黒髪、カラスの濡れ羽色で決まりでしょう。男の茶髪？ひげが似合う人はいるけど…、無茶では？。

“ちょっと一息”

“平等・公平”

No.6

生産部部长 山本知男

この間私が所属しているバンドでも役員改正がありまして、ちょっと騒ぎになりました。

趣味が高じてこういうバンドに参加している仲間なので、みんなが平等に役に就いてみんなで運営しましょう、と言うのが現役員から提案が出ました。実際は一部の人のみが仕事と家庭とバンドという狭間で四苦八苦しながら運営しているのがナンギに成って来たから全員に協力して欲しいと言うのが本音。でも団員の構成は社会人成り立ての人から私みたいな長老まで、そして子育て真っ最中で子連れで練習に来る人や、家に介護する人がいて練習以外に家を空けるのは無理など様々。あまり無理言うなら辞めなきゃいけない、それぞれの事情を考慮して公平にやってくれと言う意見も出て、さあ大変。役員といってもアマチュアなので当然報酬はなし。役どころとしては、運営面で団長、副団長、事務局長、会計、コンサート実行委員等々、技術面で指揮者、トレーナー、パートリーダー等々、結構いろいろあるけど、団員はそんなに多くないの、ほとんど一部の人が兼任状態。もっと人数がいれば解決する事も知れませんが、団員は少ないし若い人があまり積極的でない。今中心になっているのは4~50代の連中。私も若い時は団長をやって、いろいろと大変だったけど自分の思い通りにバンドを運営出来て、それなりに充実感を持ってたものですが、今の若者にはそんな気がない。やってみれば結構面白味も解るだろうと言う思いもあったんですが、結局は公平にと言う意見に押されて、また同じ人達が同じようにやる事になりました。平等・公平って言うのは、どっかの会社でも似たような話があって、一部の出来る人に仕事が集中する。もっと平等に廻せないかと策を弄するけど、結局出来ない人にやらせて、やり直しになればムダが多くなるだけ。ムダが出れば利益が減る。それなら出来る人にやらせれば効率良く利益も上がる。そして報酬は出来高に合わせて公平に出す。そうすれば不満も出ないはず・・・だけど実際は公平にならない。また誰が誰よりどれ位多く貰ったか、なんてのは本人には解らない。結局、こんなもんかな~って感じになって不満は消えない。我が家も同じ、稼ぎは私が多いのに家計はママが握って公平じゃない(と私は思っている)。文句を言うと「じゃあ、家の事も平等にやろうよ」って事になって分が悪い。何かうまくゴマかされているような気がするのは私だけ?・・・平等と公平って、字面は簡単だけど、うまく使い分けられないのが現状ですね。

◆ ちょっと豆知識 ◆ その14

「設備屋の本懐」

技術営業部 課長 成田 護 (mamoru@shinyo.co.jp)

この夏、国内における大きなワインコンペ二つの審査結果が相次いで発表されました。

Japan Wine Competition (国産ワインコンクール) と、JAPAN WINE CHALLENGE (ジャパン・ワイン・チャレンジ:以下『JWC』)。

前者は国産のワインのみを対象とし、各部門を通じた総出品点数は 690 点。

一方後者は、世界 27 カ国から 1,350 点の出品があったとのこと。(いずれもそれぞれの HP より) 受賞者リストを拝見すると、いずれにも弊社のお客様であるワインメーカーさまの名前が数多く見られ、設備を提供する我々としても非常に嬉しく思いました。

とりわけ今回嬉しかったのは、JWC において、私の担当するワインメーカーさんが、初めて出品されたスパークリングワインで Seal of Approval (銅賞の下、とのことなので『奨励賞』的な位置付けか?) を受賞されたこと。

今回の受賞の発端は、このスパークリングワイン製造用の設備を私が「売り付けた」ことに始まりません。設備の導入そのものはお客様サイドでも多少検討されていたものの、なかなか踏ん切りがつかない様子でしたが、言葉を弄し?、その気にさせて設備をご購入いただきました。

メーカーさまご自身の努力・研鑽もさることながら、機器のトラブルがあれば飛んで行き、製造方法について夜中に携帯メールのやり取りをし、ある時は携帯電話が熱くなるまでディスカッションをたたかわせ、そうしたことの積み重ねが、多少なりとも今回の受賞に貢献出来ていたのかも知れないと思うと、設備屋としてこれほど嬉しいことはありません。

薄暗い感の中で、「成田さんにこの設備紹介してもらって本当に良かった」とお客様から言っていた時には、胸が熱くなって言葉に詰まりました。

メーカーの皆さんのよきパートナーであり続けたい。そう願って、今後も精進して参ります。

Mamma Mia マンマ・ミーア

エッセイ



生産部主任 島貫 修一

「遺伝子だけの男なんかいらない」と主人公のドナ(メリル・ストリープ)は言い放った。確かに哺乳類の多くの種類のオスは遺伝子を残すだけで、子育てはメスが担っているのが普通だ。当然ながら人間のオスにもこの本能に忠実な者が多く、こうもはっきり言われると男としては立場が無い。などと堅苦しく考えなくてもこのミュージカル映画を見れば、哺乳類・霊長目・ヒト科のメス達(女性のみなさんです)のたくましさには圧倒される。

恋多き時代が遠い昔になってしまったドナも、今ではしっかりと根っこを張った生活の中で働き一人娘を育て上げた。そんな彼女と島の女性達がダンシング・クイーンを棧橋の上で歌うシーンは圧巻だ。手足を振り上げ跳ね回り楽しそうに歌い踊っている。更に女性だけの男子禁制パーティーでは、身体に密着したコスチュームを着込んだドナと友人達のオバサン(失礼)三人組には、崩れた体形(重ねて失礼)もなんのそのといった迫力がある。物語としては結婚式準備と昔の恋人達(複数形)との再会を描いた喜劇映画だが、最初から最後まで主演は女性達で男性は彼女達に振り回される存在でしかない。

映画のロケをしたエーゲ海の島の美しい風景と、次々と流れるアバの名曲は目も耳も楽しませてくれるし、こんな所で暮らせたならたとえ尻に敷かれる毎日であっても、人生を楽しめるのではないかと思ってしまう。